

牧師室から (2021.5.16)

この頃老化のせいか、聖書を読んでいて、濁点と半濁点の区別がつきにくくなった。しかしそれだけではなかった……

5月6日の聖書日課（ローズンゲン）の新約はルカ12章22～24であり、そこはマタイの並行記事「空の鳥を見よ……」でよく知られたところである。今まで気づかなかったのかもしれないが、外国語で読んでみて24節が鳥ではなく鳥であることに気がついた（鳥と鳥は全く別の言葉であるから）。イエス様が「空の鳥を見よ」と言われたのは、その前後に雀が出てきているので、今までは、てっきり雀のような鳥を指さしてお話されているイメージがあった。かなりのイメージチェンジであった。

聖書はその内容量が多いので、一冊にするとその文字は大抵小さくなっているのが多い。若い人ならよいが、読む人が年配のものが多いであろうことを考えれば、鳥という字を「カラス」などにしたら親切ではないかと思った。そこで口語訳聖書を見たら「からす」、文語訳聖書では「鴉」になっていた。しかし新しく出た協会訳では鳥のままであった。鳥にも色々種類があるのだろうけれども……

鳥というと一般的には気味の良くない感じがする鳥であろう。しかし聖書では、それほど悪いというわけではない。箱舟から探査に行った最初の鳥であり、おなかの空いたエリヤにご飯を届けてくれたまめな鳥である。そのような鳥は神の愛を示すものであり、天の父は彼らを養ってくださる。

庭に出て見たら、向かいのお宅の生ごみのネットを、鳥が一所懸命に突っついていて、暫く根気よく突っついていたが、無理と分かり、諦めて飛び去ってしまった。それでも、きっとどこかでエサを見つけるだろう。生存のために必要な行為を気持ち悪いと感じるのも人間中心の思いであるが、正直言ってあまり歓迎できない鳥である。しかし、人間から見た良し悪し、利害を越えて、この世の命あるものはすべて主の御手の中にあることを、改めて考えさせられる。

(鈴木淳一牧師)